ホストファミリー体験記（アジア架け橋プロジェクト 2021）

「海外に行けないなら、向こうから来てもらおう！」という思いから検討を始めた留学生の受け入れ。それは長女のカナダ修学旅行など予定していた海外研修がコロナにより消えたことがきっかけでした。その後、ホストファミリーをすることが正式に決まり、我が家にはラオスからの留学生マリナさんが来ることになりました。受け入れ日が近づき、マリナさんの立派なプロフィールを見るうちに、我が家でいいのだろうかと心配にもなりましたが、いざ受け入れてみると、すぐにうちとけ新しい生活がスタートしました。あれこれ想像していたことは杞憂に終わり、明るいマリナさんとの、笑いあり、涙ありの４ヶ月半はあっという間に過ぎました。

今、振り返りの機会をいただき、ホストファミリー体験について思うことは大きく３つあります。

①お互いに関心を持ち続けることで、だんだんと家族になっていく濃密な時間だったこと。
②留学生が持つ目標感やハングリーさを肌で感じることができたこと。
③自分たちや日本について考えさせられ、良い面とともに井の中の蛙になっているのではないかと危機感を持てたこと。

もう４か月半前に戻ることができないほどホストファミリー体験は大きな転換の機会になりました。ご紹介いただいた南高校とご担当の先生方、留学団体の AFS の方々にお礼申し上げます。

＜ホストファミリー体験がもたらしてくれたもの＞

・英語で会話することに抵抗が少なくなった
・たくさん出かけ、たくさん食べ、発見も多かった
・受け入れ前の総片づけで家の中の物が大幅に減り快適になった
・家族のルールの見直しができた
・短い期間ではあったが、①ホストファミリーと一緒にやってみる→②友達とやる→③自分ひとりでやる、と、成長していくので、後押しや見守ることの大切さに気がついた

＜マリナさんから学んだこと＞

・奨学金留学、英語学習への意識が高く、参考になった
・高い志でボランティア活動をする行動力に違いを感じた
・ラオスでは家事を手伝う習慣があり、娘たちの刺激になった
・果敢にチャレンジする姿勢に影響をうけた

＜こうすればもっとよくなったと思うこと＞

・日本語習得に対して知識があるとアドバイスできた
・直してほしいことのいくつかは、注意できずにいたので、その場で言うようにできればよかった
・家族の英語力に差があったので、よく使う会話は最初に練習するなどして慣らしておくとよかった